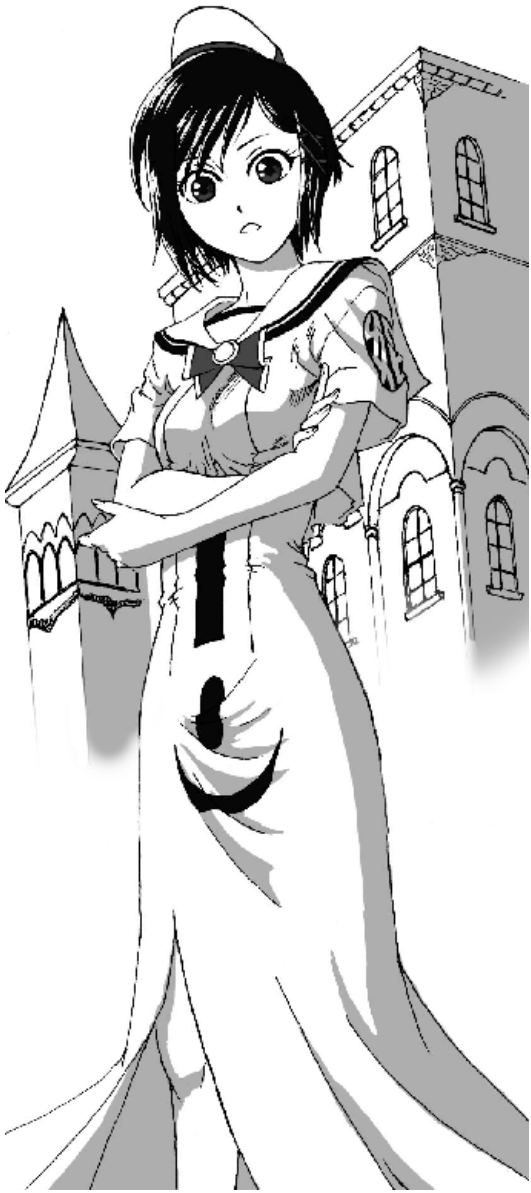
里自身に見せ付けるようにその両手を目の前にかざした。
そして、灯里の目の前に現れたのはいつも愛用している手袋をはめた右手ではなく、左手同様に素肌を露にした右手だった。
「え、え、えええええええええええ！？」
自分の記憶が確かならば、自分はついさっきまで確かに右手に手袋をはめていたはずで、その布越しにオールを握っていた感触が今でもしっかりと残っている。
「ちょっとー、灯里ってばほんとに大丈夫？」
視線を上げると眉根を寄せた藍華の向こうに人が歩いていくのが見えた。それまでが嘘のように先刻の静けさはなりを潜め、桟橋に面した広場には街を行き交う人々の笑顔と話し声が溢れ出す。動き出したネオ・ヴェネツィアのありふれた日常。



「え、あ、あれ？　……ってわあっ」
わたわたと辺りを見回すだけで要領を得ない灯里に業を煮やしたのか、藍華は灯里の右手を掴んだまま、舟から引っ張り上げるとそのまま走り出す。突然のことにつんのめりそうになりながらもどうにか踏ん張ると、そのまま前を走る藍華を追いかける。勢い良く走り出した為、飛んで行きそうになった帽子をなんとか自由な左手で押さえた。
藍華に導かれるまま、ネオ・ヴェネツィアの街を駆ける灯里。彼女の横を流れていくその景色は確かに彼女の慣れ親しんだネオ・ヴェネツィアの街並みそのものであった。いつも通る建物の隙間を走り、よく顔を出すカフェが彼女の横を過ぎ去っていく。
「あ……」